

## 新宿武蔵野館と徳川夢声

♪シネマみましょか お茶のみましょか いっそ小田急で  
逃げましょか かわる新宿 あの武蔵野の 月もデパート  
の屋根にでる♪

昭和4年に大ヒットした「東京行進曲」の一節ですが、関東大震災後、ターミナル駅となった新宿の急発展ぶりが伝わってきます。当時、シネマ（映画）は娯楽の王様で、新宿を代表する映画館といえば、武蔵野館。その人気は主任弁士の徳川夢声によるところ大でした。弁士とは無声映画の説明員のことで、その巧拙が映画の観賞に大きな影響を与えたのです。

ご存知の方も多いと思いますが、徳川夢声は半世紀近く天沼に居を構えていました。昨年、武蔵野館が開館100年を迎えたこともあり、今回は、中央線が結ぶ両者の記憶に触れてみたいと思います。

木造タイル張り3階建ての最初の武蔵野館が建てられたのは大正9年。東京の場末だった新宿に賑わいと呼ぶには、当時、流行の先端だった映画館をつくるのがいいと考えた商店主たちの共同出資によるものでした。最初、二番館からスタートした武蔵野館は客の入りもよくありませんでした。しかし、大正12年の大震災を機に新宿が新しい繁華街へと発展すると、武蔵野館も洋画の封切館となり、さらなる高みを目指します。それには、当代一流の弁士が必要と、スカウトしたのが新鮮な話術で学生やインテリにも受けていた徳川夢声でした。当時のことを夢声はこう書いています。「この昭和2年こそは、旧武蔵野館の最高潮時代であつた」「この昭和2年の如く、おしなべての名編佳作が、私の舌にかゝつた事はない」

同じ昭和2年、夢声は、土地会社を運営する義弟の勧めで、天沼の大根畑をつぶした分譲地を170坪買い、自邸を建てています。「荻窪なんて、八王子の手前ぢやないか。そんな草深いところ、厭なこつた！」と、渋々ながら出掛けてみると、「なるほど駅から実に近い。公設市場があつたり、製材所があつたり、相当ゴミゴミしてはゐるが、分譲地の周囲三方は悪くない環境」だったからです。

しかし、映画の技術は日進月歩。昭和4年5月9日、日本最初のトーキー興行が新宿武蔵野館で催されます。それは、『ハワイの唄と踊り』『進軍』の二本立てで、『発声（トーキー）の、いろいろの音を聴かせるため、でっち上げたやうな物語』でしたが、弁士にとっては十分な脅威でした。のちに、夢声はこう書いています。「その時聴へた汽笛の音は、数年間私の耳について離れなかつた。厭だつたのは、私の家のすぐ近くに中央線が通り、其のトーキーの音と、寸分違わない音を出す場合だ。（中略）私ども説明業者を壊滅させたトーキーの、第一回興行の時の汽笛が、今でも私を脅やかすのであろう」



第二次武蔵野館（昭和22年撮影）  
写真提供：武蔵野興行株式会社

（引用は、すべて『夢声漫談 昭和篇』より）

「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男